# 佐明集

内閣文庫

内閣文庫

此和歌の作者は後鳥羽院の第三皇子にて文暦元年正月廿九日に
生れ給ひ建長八年に薨ず
より隠岐の国に流され給ひ建保六年に崩ず
の御孫にて保元の乱に敗れ給ひ承久三年
仲恭天皇の御弟にて寛喜二年八月七日に誕生し
元暦元年正月廿九日に薨ず
乃至極変化を極め給ひ
ものとの御事なり此和歌を佐渡院と名付奉る

説く来りしといへとも伊勢か年代記に伊
勢物語といふハ在中将わか身のうへを記して実
事と書しを伊勢にかくしいへり
物語中にて七条の后へ通ひしをは不義
業の事なとを専として記せしは虚実あひま
しはりてわろしといへは古への事なとを見て作意せる
語もあるへし是それ作り物語の作法也男女の
容を記してあるへきそのいなの間に志る
事を志るさんハ絶代の撰集なとに其の作意を

載たりといふはさとれといへりしきとそ笑も
いひとりよろしからぬ事なとすなはち志う
なりたりきしにたきとまゝくもしきさすそ今もし
世の人の為へこゝすわれ掲て衣への説あり
し是千代の物体といふも不義の説ハ抱へり
色也に此物語ハ色をつけて読て好色淫乱
本因果（ゲン）（ヨウ）の後のことにかきを君臣父子
夫婦朋友の五倫の公に善悪の因縁となる
物へし

校合昏 ○此昏ハ祖父利昭写ス所也予又諸昏ヲ書入シテ子孫ニ傳ル者也 弘化五年春三月 世良利貞 五

○右葉考別記 累シテ万別ト昏ス別記也。寄居歌談。冠辭考

傳受入讀僻繪入
板行世可ヲ多ク出ル故ニ多ク
ヲ求ムルヒトヲ求メ得ルヲアラバ板行仕
得ル入仕ル初作ノ為ニ世ニ
出ル 小作ル千三千目 其外ニ多ク板

一 板昔ものがたりとて男ありけり

むかし花とこ 昔とい仕初ル頃ハ行がわたり
てうみの伊勢ノ国ニ家の業の数据ふうるものの
再ふりあるもんをもとむ初行ル中ニ
とくさたりさるも花初ル 公し人の妻ものうるさき
をうたたねをなをなをつくるに今
の世ふもあるわさ
去年ハことしの昔とい初ル 男とハ業平
のうるさ世わ世ハ
業平のうるさ

うちうちふうして　和冠と出そでわてをうち
あらうるしえ後の　元後の年月は
たゝかすいとつの年のつもりをうつ
附い作乃三宝の法句々〳〵業手を元後を
動に出し除経を修行をさとむ法花一
部の肝心をうち冠してのての字の下中句
をさとる〳〵
部〳〵の系すのことに　高天の系い人王四
十三代元乃三宝を作り日本武光仏宝

を七代部に百七年　石和の国添（イツカミ）
部にあり毛内小毛目の里あり
あるゝして　部に業手の能あり〳〵
ちにいふなり　行〳〵に行うること又修和小行
ることゝ成りあり内ふうして毛目行
うにいかすす元後しての内ふうして
行うるゝ
そのことに　毛目の里
いと　こちうをもと世俗の振ぶいることゝ

あまのはしたて　媚の字なしかわらを用ひ又いけさう
しきう公卿も用ひられ武家なし
そそうすみやう　花とゝいはさるし　姉妹し
この花とこと　業平し
ふまみてやう　塩竈と書くしにあご〜かとん
のそそそそし
花もなそす　花のひら〜すし
ふるさとし　高砂や同邪あの(ふ
あとのう

引歌　ふるさとゝあうふあ〜の邪ふそそそそ
すあそそふをう　六月の天子祇園会の
祭りあり
いとそそ〜あくて　二条中と書世字の公時い
下人をそ〜たりのとゝ
とゝふ公と又　強そ書し法の字の付いう内
あのあのをうあ花
ふく
引歌　ささそそい秋その嵐のあ〜しわあそ〜たあ

の稿の板そしやはこののかいそ〜たかい法て宮
乃句く
ゆちまとひふもう　分書さうし
うこそねのすそとこそうて　苦い数書をそ
紙ふうこ〜ゆ（行場のるかもい名紙あう
おとごるたう　稿元のすそを切て名紙ふ
して元をうこそてゆ　一説元中ていはそぐゆ〜すそを書る世句の歌奥の和ふう
〜元ふうそのはふうそわり
その男元のふずりのうぐわを句くたりる

伊勢ゥ住したる頃こそのぐずりといい苦い稿の
響乗にすりうこそねを用たり陸奥信濃郡
ゆて大句ゥ在の行りて（さいアイ）ぐ菖といい名よのけ
を使（ふぼり）はて絡ふ紙を稽付こうこ西〜て稿
元のるいさたすう句ゆてうんえい業
まのうこそねを西こそを常ゆてすもる少数を信
郡ゆてするの句れい紙元行ゥたふ乞ひて
奥元ふ史帰おうしたる男北〜たる元石稿の
弥生こうれい西郡とて亀こそい句人ゆすうこのこ

（引ヶ）
ケヤキの葉の下り葉のごとくなる
ものなり　ケヤキ　ケヤキ　ケヤキ
ものとい（原ハ此ハ不ニ）ハ墨の墨
書ニ若葉とハ女をたとへていつる又若葉
のうへにあるべきものの枝ゝ
ものとハ中ハわかゝの限りなく枝をあ
ぶの紋の神紋なるにたとへてよわり
此ハ序ニ云ふ序ニ云ふ序ニ云ふ
てあるのにわりをかしてもひ
（教ヶ）とちん（ちんたゝみそやりにくゝ云ふ和俗の地）
とわるゝとあるゝことをことゝ
ゝ

（教ヶ）をいつきてやるやうにハ中ゝ世業ハ中のくりかをあてやる）
をいつくゝてゝひやりにくゝ　女のかたゝ（日ハ）進付く
云ふ中ゝにくゝとしてあ重ゝ
一位業ハの方ハ女の方を進付てをすゝ
つゝて行りゝくゝる　ゝ行りひゝん　此花乃
他ハの何ゝ女の紋に業ハの葉の花ハに
ハの花ハの葉と見ゝるゝつゝて行りゝき
ゝ行りひゝんをゝゝゝ
とふゝ付ハるのつゝでゝ此ハの字ゝにてとす
む付ハ是ニつゝて云ハ付ハ

一説ついてはりしろとさまやはりひさんとハ伊
勢の詞に業平の朝臣の手向ハみちのくの
谷あがり太夫につゐてはりしろとさるやうひ
きんと王自神よきの手向とよめる詞の注を
したるし

古今
みちのくのしのぶもぢずりたれゆへに乱れそめ
にし我ならなくに　此哥も序哥と云の句の
発語ハ同じ下の句古今ハ乱れんと思ふ
我ならなくにとあり河原の左大臣の哥く融

公の哥の心ハ誰ゆへにも乱れんと思ふ我ならなくにと
君ゆへにこそ乱るゝを今此女乱れそめにしと
いひかくるハ誰ゆへにか乱れそめにし我ゆへの乱を
ハかはしと心をあらはしたる詞の翻案の様にし
又是によりて此哥の心をいひつゝる源氏物語に
も有之一説ハ下の句の心誰ゆへに乱れそめにしと我
思ひこそ乱れそめにしと業平の思ひよせ乱
れ限なしと思ひよするとよめるハ此融公の哥の意
思ひ乱しとよく似たるとあはせ心と云哥の心の説哥

に伊勢出たるこれ河原左兵衛融公の子こ
左今ハ京都をさして我朝〳〵朝にとゝにて
ハ京都をなつかしと云ハ伊勢ゝ出ハやまうぶ
左人〻京人も出たるかひ有るものこと左今に入
舟に書をゝ引かをして入るゝとゝ入ハ探集
ハ入舟ハ見れの子もおゝ引かをして入る例なよ
た多し
とゝ子の心をへこ　ハ
こゝとゝ伊勢も

融公の子の心をへを見久へ

一説業平のうゝ子百姓の子のなゝ計みち
のくの子の心をを知りとゝるゝ世物語の奥
小野の小こ舟ハわもるに地たる子中世を
ワれこゝりるむこゝの心の心をへこゝとゝな
も花の　年ハこゝ数左に融公ハ寛平七年八
月に薨を年七十二業平ハ人を五十七代陽
成天皇の舟元慶四年に年を年五十六の
時融公ハ五十八こ業平に年二の兄こ高れハ
業平ハ代代の融公を兄ハ人ハてこゝ子を知て

ものゝ人〻かゝるを業とし家〻第一の業
事とすれども中にもあるかゝるを法にせば
和歌を作るかゝる書物（業平の事なり）
その心は世々のかゝるこゝろの
心を注したるこゝろ法世の事をこゝに注に
百中にて日代の人の事を注事に引事
もし古今假名序に
心得ずまてそこをつゝ問ふ花ちるこゝも
風ふく毎に是は古今序の作者業平

ゝ法慎云の陳子に心得ることたるを
古今の序六義の事に引こゝろ法の人の事
をも注事に引事なるこゝろ
見るべし和歌一流の心
事をも女の事に用事なり世々みちの
事を注事に作
ゝ引出たるこゝろすをこゝろやまるまは
しるべきこゝろ
心を男〻女の事にて見は婦人たるこ
こゝ女の事に用事

はやまりにつぐむを取かわ小倍へ
ちそやさ　お年（イチハヤキ）　遠つよと（イチハヤキ）　書すこやう有りと
ふるくこ為有りるまし
えびを有むしりる　有そけをそそすく風流（フウリウ）小倍
粕（サウ）ぞ所ふもをへ見花い風（ミヤビ）ぞとうけう有人よ
つて月ふふこ在つもし伝場う弱し
一　荷男あうりう有しの系をそ有れ　橿武天皇延
暦二年十一月高丘の系を去て山城の国し
弘仁（グニン）に移をうつを星と也星の系と言う国中

二年十月原又菅（カドノ）地郡ふうつをそこ西京城し
この系を　今の年者の系し
人の家をぐこぐまぐりるとこに　世代遷移
うつを千年のおつぐ有もいのまこ家有を
もそこ尾せぐべし
小の系に　そ有の系の系ようを次第に第系
をそこ尾せし

人をこそ
なりる物
そこ見むし

その女世人ふいまこれう
ぬこうの人ふとの系をてよむ　世の中の人にまこれ
ぬこうの人ふとの系をてよむ　たうと

あるこころあるこころもつかはしたる文どもの清
を世人(ヨヒト)祝(ホ)をとりてをかこ
ひとりのこもあるごとくしし　男(ヲノコ)ありけり
まわたとこ　女(ヲミナ)と書く業(ワザ)のるこ実(ジツ)
人とりかこ
あるこころのこころひて　あひてこころ
あるうかふふ　細(ホソ)のるこころあるこ
在(ヲ)こころをを祝(ホ)せてこころをかこてい芝のる
とてあるこころ　あるひか在をてかかを

強(シヒ)て祝(ホ)こまをすれ和(ワ)をかこ出こ用こもある
こすとこ出(イデ)ものあれい芝のあれい出(イデ)をあるに
見てのこう　芝(シバ)を怪(アヤシ)人眠不(ネムレヌ)月移(ツキウツ)記(シルス)
[illegible]千(カンニ)　主前(ヒ)

一(三)　昔男ありけり　(扱二条后)女のもとに
心をとるる女子(ケサウ)を恋(ケサウ)と云又假粧(ケサウ)た出形(ケサウ)
かてて用(ヨ)ゐこ
引こ　海鹿(ジキ)といふ藻こ付てこをとづを
まかりたる文のたこに書(カキ)こ

とひかへしてむしてのもとに祈りて命を乞ひ小祠
をしつくり　薄の宿八神屋こんひをてい玉屋
小袖かへるへしとひかへしわらとて人と命をて薄の
宿に神をとうしさてと寝んあをとし
（引かへ乃ち）あひてせんかいまのうて命も生むしてうしん宿
小ふうしうを祈り
二條のきさきの　二條后高子（タカキコ）　中納言藤原（ナカノ）の基経（モトツネ）の女　清和（セイワ）
天皇の后陽成天皇の母
貞観八年十二月年十二月陽成天皇を産み元慶元年正月
十二月陽成天皇を産み元慶元年正月
天皇十果ひて位につきて月年六十六
中宮に参りて延喜七年三月六十九日果
ひて憂す
まぶ門ひもつくうまつうとく　清和天皇につく
まううつねの丹こ
たぐうと　元慶（クワンケイ）　月五のうまこ
一四　（秋の夜長のあかぬまに明くしてくれぬるものとなむしられける）
一首　ながしの二條　今の京の京の京の西條こ
たかがさいの宮　宮大后（ヨホキサイノミヤ）と申こ　源厳后子（ミナモトノイツキコ）
西條の后とも号す　（故后大臣冬嗣公のひめ君トアリ　忠仁公の后ニ侍女文徳天皇の御母陽成天皇の御母　文
徳清和天皇の御母陽成天皇の御母）

仁天皇元年の冊立女御小まいり嘉祥元
年三月清和天皇を産たてまつる天安二年
十二月年三十一ゆゑ中宮の位に上る貞
観元年正月皇太后宮と号す
多武峯御願寺 昌泰二年四月十七日崩御 七十二歳
藤原の朝臣を以中宮皇后宮と号帝の
母を以皇太后宮と号す
皇太后宮と云し
川のたい 藤原の内乃御台 二條后を

二条の宮とも
はふかゝ〳〵て 四条にいまゝ〳〵でし
りとゝ〳〵ひらの 行平 業平 寒巻
おとらしと。 在憂し
又の年の九月 四年三月 感 付 花滅流なる天
去年人今月 此 中人 面 桃花相映紅 面不
去年今何処 桃花依旧笑春風 催後
あゝ〳〵 おのゝ〳〵 人まれ人のれるまゝ
月やはゝ〳〵 春やむかしの春の月 秋ひとつ

あかして 又にかへしたりける歌さ
春ハ月も昔の月にて春も昔の春にて
いかさま我身ひとつハもとの身にて有ぞと詠した
るいひつくさゞる余意を含 貫之か古今の序
に在原業平ハ其心余りて詞たらずと云る
花のしほめる如くして匂ひのこれるかことしとかけり
これもさる体なと歌に見ゆ
秋の野のくとあるに 此歌を志てよく余情を
思入深く歌あらしあるところをひかりへ留めた

よみてよんでと強く なども申さる 歌には字也

一[五] 昔男ありけり京の五條わたりに 此段の説の
口伝
ときなり 二條ノ后へかよひし
みそかに 密と忍びたりしかハ陽成院の后を
ついひぢ ひそといふもの也 築地也

あるじ隠名の此古今ニハ

[古今] 人しれぬ我かよひ路の関守はよひよひことにうちも寝なゝむ
歌ん 忍路の関守ハよひの間とく寝よかしと
深にうち通ひ度とく
せらる 様也く

あるじ　源氏后く
ゆ〜してぐう　ゆ〜あるまふいあ〜まぶ三人
源醍〜て　ゆをゆるまく
せうとくく　二條后の兄弟こ　基経　国経　あぞこ
一六
菊男　ゆうはう　女の元　ゆまじうる　那須女
業平のうこ　ゆうこ　ゆうこ　女
事をへてこぞひ　ひうこうを　えしこ　とこ
みちのひうこ　ふゆこ　和遠　とうこ
らうして　事若　事男　てこ

あ〜こ川　内裏の内ふ　塵ゆとと　源ゆうこ　川こ
汚溝（ギコカウ）のうこ
ゆて　将（ゆはうヨム）の字こひこつもてゆこ
れて　ゆにぞと　男　男ふの　男を　問こ　和源さた
の　男を　れ　ゆ〜ゆねゆへこ
たにあ　ゆを　女を　返ゆ　人のあ　西を　とう
かこ　へ　変（カヘナリ）こ　へこ
いこ　ぐう　ゆう　つ〜く　鳴こ
あぞ〜ゆ〜　あを　たる　ゆこ　人　ゆこ　西を　とう

くらいは座しと座のうちとうむち座敷の
さうぢ座とそうり
ゆゑやかくひとを打ひて　かのたけさ細く又いと
内業をも生業同前なりとこそあるべし
打にをやひとくちまひてぶう　爰に人ありと
竹つけ法げうしんの人をふうして女をい
たしうをを云し
あかやといひけりと　あかあかあし女の咽喉
うう舌うし

（さく舌の略り　枝まつ長　ゆあんをひつく　とひてそにやく　夜かはりとして　ゆをまちうるたち　ゆをまちうるたち）

いてこ一枝つけこ一

こ一ちうをして　踏躇（アしスり）をも切にうり切むり
皇ねをを人のとひ一村家とうう人の家を皇ねをと
中あを　おにをのうの家を皇ねをと
女のとひ一にこを村ハ切切公達の形ふ
たるもをうう一に海柄切ったし二村家と
うう人をして秋月清切と今
ぬ切ひいを中しうを切をを村清切と今
うれい　をより未仏名の切
いとこの女師　清愛原の文徳の女師立て内表

小松内大臣殿のすゑ
つぐ内大臣殿にて。源氏の后の母方に二条
の后とぞいひ人にて三位中将とぞ付
たてまつる
堀川の右大臣基経
四せうとありけるかの女
と聞こえ 昭宣公の弟二男 叔父忠仁公房の御子
左大臣 左近衛中将 兵部卿宮 式部卿宮 右近衛中将
長谷の一男 右大臣
ら二条后の兄

海代　ちゝ宮のまゐりくるを我は一向に田舎にてもの
さ郎の方をたしなみとして波のうゑ海つゝく海り
たゝさゝら俳諧沢山

八
一　昔男しらとりとする人　友とも
（無くてもよろしい故文盛の意）
信濃の国　平沢たゝらの人々〳〵をみちに蹈迷
ひけるとたどりかしこ
（秋夜）
信濃なる浅間の嶽に立ける煙をたゝこゝの人々
とゝあね　郎に訓ねつゝしきゝ浅間の嶽
立ける煙をいとゝをゝ人〳〵おつゝとうんとゞゝねゝ

と思ふ業平張愁の句たゝら煙も一人おつゝ
ゝ人ゝ思ふこゝろ人ゝとうんとゝあるゝ
（イクバクノカウビンゾモニーガスヨモヒコ）
幾許の人看焦四秋風吹靡浅間嶽　南化
今世代ゝのつゝく一首の神代世と所とをゝ
ゝ聖ゝ

九
一　昔男〳〵ゝ　七月ゝ業平五孫三
代の人ゝ世代ゝ友信とゝ
ゝゝれゝ信張小歌ゝ
たゝ行ゝ人ゝ　業平のゝ郎ゝ

利良寺屋舗八橋

ところに志る人ありさらに　水の縦横にさまよふ所
水ゆく河のくもりき
かく蜘蛛の手八つあるといへとて　をとし
川云　み渡しするにそ八橋の名をかけてにしける所は
ここそなし
志しをやつはし　なのまゝにかぞへし此橋けに
さいふところみつあつしといふ元和の比秋元家
へいさうしかい橋は絶てひとつもいへさらなれは
花のこゝろ橋も渡泥の沢をわたて蜘手にわたとさる上

猿代
平の海　此平柳あるへし　官家の名に
女月ちうつりゆくか柳海名乃河の末の世乃菩
秋錦の抄　なれつひ　糒(ホシイ)こそるまる王子の舟　こそるまる王子ハ孝徳の御子し
川云　家にかまへけるよりいひを草花猿り　あれハ杜若
ハりる
きつゝなれにしつまをとものうこに　京の前く
古今　からころも
きつゝなれり

つまとわれい
ちりぐくこちわる
こひをしたひて　常にい秀句多くかな
ら人（ひとり）を折句面白いくるしくくを弱者も
孫はわつまを句をを折にさふ人おもい一人句くさ
かをひかりう　感激して句をびさこ
ゆきくくて一字千の心にゆきうて　心路の秋を
思う　を別（レテ）奉（ニ）城万里孤心三年入（ニ）高州
二歳行

苔ぐえでい　枝つる（じゅうり）はのびてにをいし苔にわくを
すてろ句る　句句をとをひるすし幸に出こ平に
ちて公望くく坐にけり後成の三に
雖波（ハ）好史たくかに宿ろてすろに施の土屋
ちてい
すぼ（枝）ろ　傍こ土屋を假名ふいすを出こ土屋を
ク（せて）すに句ろこ
おつこう　乃ちてけ逢こう　君向（ニ）潯湘（ニ）
秋向奉（ニ）二石

くにたいとてのいとてのいわとてこ修行者
の約し
います。初めまする
こんもいろん人　第一の約人し
その人の門のもと　ゆんでとかさ方や
（新仮名）後河の国宮津の山の祝宮の祝宮も美宮も人のかねこり
山に住て美祝宮人の多ねとこ又いを二水
君にあつねとて公るあり
国主のごー　門に毎月晦日毎の心の書をとり

（新仮名）わの孫悟をもとーをこ心の三条ことを向向〜云
門ちこねこいふの祝のつそ　君い弱者みこそ
ふも今夜ったい門を志〜ねとこ
のこまだ〜に書の書ゆ〜ん　麻のよ生の姫が
ゆうに書ったとこ〜ろこ〜の国主弱の
宮黄に屋門ニ廣ニ壁玉とかもの
こにたとへて　夜に祝わてあにたこい所の江
叡の心ホとあ〜〜ちんとこ心の言ことをの
（抜すぬく抜ぬく出のかりとこ色）ちんちり　宮家の弱い不知ここ武弱恒た

もし所をつゝみたるハ心のすかたに似たり
さて是を隠庵とハ云なり又私に云陰を窓
よりうつしたる白をハうつして是心のすかたに
たとへしなるへし
なかをゆきりして　信濃武蔵をさして武蔵国に
下総国　志もつふさとよむへし　仮名書にせ
むさしの　群居したる人一所に集てあるに
いましめり　弟人に
さやかにのさ　さやく弟子のことをいふ

いよく其さうを見つけて杖をもちて其伝をね神く
志らきとう　其外ハ皆ハさく　胸後ハ志らくに
とおとおくらつきそし比ゆかしおさみよ
すむく
志紀のさきさき　略の法しておろそかに
名刀れて其とてハ其後外之人ハおろそか
其人ハ勧所詞と部の名におかれさるハわかさ
人の宿名をとをかんに
弟こそりて下さんとなり　祭中の人を涙て感涙を流し

[illegible]之抄 琵琶抄

よばひ 私ハ心通ずる文也
一十 昔男 父ハなほ人にて べちの人におもはんとて
母なん藤原なりける 貴人に（私 貴人ハ藤原氏の子）貴人（アテヒト）と申す風流に貴人
と思ひたる詞也 母ハ業平にあはせんと思ふて
父ハ何とも 種姓（シユ）不定 直（ナヲ）人ハ凡人の儀
母なん藤原 源平藤橘四姓の中に藤氏ハ貴
統なりとて（私 聟兼也 むこにならんとするをいふ）
むこがね 異名と云也 源氏物語にも后がねと云
がねとハ詞をそへたる也 むこがねとハ業平の事也

よみておこせたり
すむ所入間の郡みよしの里 武蔵国入間郡の三
芳野の里也 今世ハ川越と云 ニ云地ハ
古和哥 我物語ニ云也
みよし野のたのむの雁もひたぶるに 一向と云也
君が方にぞよると鳴くなる よるハよひの儀
むこがねかへし 業平也
わが方によると鳴くなるみよし野のたのむの雁をいつか
わすれん わが方へひとつ心に思ふを忘れじと也

人の国　化粧をいとゝ美にくゝ度なるゆゑ

十一

一むかし男ありけり　拾遺　なにはがたみじかき芦のふしの間も
逢ことをのみ思ひ寝にかなしかりけり

ゆきて　世をうきものとおもひて
ひとりゐてもの思ひをる時に
世をのがれ
二代目と云
二条后
国の人
国の人

十二

一昔男ありけり　国のかたちはいやしけれど心はなさけありけり　国のかたちは
むかしのしるしなるべし　玉の台後ゝ
しゝたる
みちのくに
中つかさ
武蔵
我もこそ
あり
し

むかしのしるしなるべし
ぬき人あり

一 女とハよりてとよに　四の字乃人をうてたれし

若むさしなる野　業平く

ここゆゑハ知りし　くくろ乃とうゑのはな

ゑんもとうりしかゑうともかりしきく咲下無縁

のわりあき祈く

此ゑゑまいひⓐハ狗ヌ噪りまくましい給ハあけ

くころくか

むさし鐙と書て　かけて打まぐと云句く武蔵鐙

信濃ゑならあと着ゑ身の浅間ヌ乗り旅ころと

名に用く今按我名を既にしくとねヌ不乃

名物をかけて出る歟

むさし鐙さすかにかけて打むかいとは祢とつらし

とふもうきし　かけて打む体のさすか思ふ

るすを為ヌとハねもつくくとふもうるさしあり

扨さすかるる名花の之の句也

たえるこれ然しけり　出家せんと恨りしくらし

こさあり

とゑハふとりⓐ之恨む武蔵鐙く付打ゆや人ハ生ね

らん　とゑうあさかりとハⓐそうしむるやその打や死

ちんとあり

十四

一 菊男しわ〳〵くうふや 仙名の類

きぐろさわ 秋ハ〳〵ぎ薬までりんかの名のやさ

ちらに 切あり

中くに忘に死あるをいふ今とこゝ

そうり 今とこゝ蠶の法のすくむ乃絲い命の

ふくしけ法蛙うハ深〳〵命ハ一生をとゝ和歌

時女忘に死あるをいふ蛙うこそ蛙子の母に

わ〳〵をは蛙子に命をうハをやく死

あるやとくしけ万葉集に中くに人とわるをい

とおうをとおふを蛙たうを母ゆ祝乃

祝あり

ちうさ（秋ハちハ名の略）ひあび 母をやをたうく蛙子あるを別ゝ

（秋ハちハ名の略）

あるをいふ

秋もあはをとゝ秋こゝをつゝの称下略こ

をあるぐ 秋雄の時ハ名ハ蛙子をとゝ秋ハ秋子を名ん

くぐりはの 今の字こ

雞こ異毒雞こ

雞声（ケイセイ）茅屋（ハウテン）月と云ハ頭少て次家の門離（ミヤウニウ）の多

にゝ〳〵れの浅茅うてゝくぐりはの尾とハ

月よ雨や夕ぬ〜〜ん
まぐさに明て　まだ〜〜さや〜〜句〜〜こ
せ句とそうつふ　せかい男こ
男系（句）（まうふとく　まりるこ
くうさこのわ○そのの松乃人句〜〜紀乃つとにうさ
とうさもこと　栄系い奥乃系の名家こ女松句
らい紀のの口づとにさそ人句とこつと云系とを
こ喜ヶ出こ代系乃女今ふいをどうさこ系系の
小海の人句〜〜ふ系を人句〜〜ふさうん



ねとこ
うこうこびひて　恨こ系回の何のうこ
たりひりこ　男のこうひもんと女の云こ
昔〜〜句でうこと句こ人の書よ　云ヶ系ヶ
ヶでうの人句ふもねん人の書と云てすこ清ヶ納
松系紙源氏句とふもあうこもこ門句
あ〜〜こうこうかく　恨ヶ紀ヶこ業ヶ系ヶ
りうこ女乃ゆ〜〜こと句ゆ〜〜こと句て系こ乃へ
こ新ヶもあ〜〜こ系こ系ヶこ系こ乃こと句こ

とひてこ

（板元いそよりの人とおもふ）佐まこ（奥さの名歟）西つひてあて（西ちのくとすと上下コ上めたり）屋りかの人のこの奥

もうんりく　公所こ新勅撰に入こう

（引ち花今出こ）とりてこふ人のこの屋でたちくもつこんりよ

しりりか

女りたりあくわてたりとも人と　業平の三を西白

くとへどこ

こりこ形こ西ひすか　（板ふてたりあへ式ちとりけ心こ本の書きまこ）その事乃りこ形こ白（ハンこ）

西ひすりよ西こ人へけあこりあ人へ

せんハ板元ハのハの子ハ中をめ絹こ

十六

一　昔紀乃屋常　業平の順女こ又業平の書

の文こ紀在原こ

ゆて乗こ

みよのみと　浮れ和仁乃文徒二代こ

故女徒兄宣平惟喬（とうみをるハ名虎女也惟喬位つきあり帯ハ年女ハ）世々乃内うつう　乃屋常ハ妹和子の後に惟喬乃

ハのと舞年ちうこ石に浮和乃代よ面ものこ

世乃内を矢（仮こ

よりつ称の人乃こにもあこを　ことハめこ　妻人貧

くるをいかに

あくてくるる　風流のふるまひ　傍（アテ）　古（アテ）

とも出給へるて用へ〳〵なるこ

ひとへにも仰すまたし〳〵居てもたむるまひ

所のこころ所〳〵　ふる歌ハなのつゝの人に仰を貪

てもたつ〳〵を写てもたこゝろ

貪りを偏愛の心　伝論　傍注

まつゝろをもこゝろ　世物をもこゝろ

こゝろあひ別こゝろ　ふる歌の書こ

枕草子　段　雑　ふる歌ハ一ツのこゝろなるをとこゝろ

とこゝろ所〳〵　更衣の中を離所々　麻離

あゝのこゝろ所〳〵　おゝつゝの書の傍

小花に所てあこゝ所へ行所

男まこゝにむつましこゝろ所〳〵

おこゝろこゝ所〳〵　書へこゝる所こを傍丹せ

こゝて離ふハ書ろ　仏花ものこゝを所に年

七も実にむつましこゝ

まこゝ口さも所こゝ　花こゝ所こゝこゝせこ

あひこゝひこゝ所こゝ　こゝの所こに　業平の子

令ハ所ハ所ハ所ハ

ふるハこゝりといとこゝれこ　枕ふれ所ハこゝ所ハこゝ所ハこゝ所ハこゝ

文に出さゆゑに

（五指）手をおりてあひ見しことをかぞふれはとをといひ

つゝよつはへにけり

よつのとしまで　指を折てかぞふるは四十年に

これ指をのをるとかぞへたり

業平　手をたにもと経てよつはへにけるを数ふるを数経るを折ゝ

ねらん　四十年へて数度か五十を数へつ今

これ別るゝをこそと女をたのみけり

これやこのあまのはころも　天人の羽衣

むべしこそ　むべは實也　しは助字也

君か　業平をさして云也

みけしと　ミケシ御衣　ミケシ出日御衣なは御衣と

奉り

（有常が奉りたるを）奉りけれ　業平の人のまうしの也

此奉の心は今業平よりをくる装束は天人の羽衣

のことくにうつくしけれはこそ業平の装束に

今まうしのあるはとうつりて心を得

こゝろ也

よろこびにたへで　又

[illegible]

一十七 年に 世間より昔といふる所 出居しる中や

又年にと云ひて昔のなもあり日ぬ行り已

おとこ[illegible]人 業平

あり 彼所に

あるあるとあるとあるたてる様に年に移りにも

まちもとう たりて昔のるを五下ものを昔に我

をあぐんとうへもとしてうに所をとるを物

業平

[illegible]

十八 昔 [illegible]

[illegible]

男ちう 業平

[illegible]

紅に匂ふ梅の枝（枝ごとに花さかせたる梅の枝を）
菓に紅の匂ひを加へ（菓に紅の匂ひを加へたる）
八幡とも加へ（八幡とも加へ）
るに我方（を）
体なのるを（体なのるを）
折て（折て）
白雪 高今
男ふ〳〵をよみる
衣をつけを（衣をつけを）

女の方をこせ（女の方をこせ）
たるすゝに（たるすゝに）
ゆ（ゆ）

中しりをと（中しりをと）
紅に匂ふ（紅に匂ふ）
たゝふ（たゝふ）
うまひ（うまひ）
あ〳〵（あ〳〵）
そを（そを）
ふ（ふ）
引ふ（引ふ）
ん（ん）
ま（ま）
る（る）
白雪 高今

一 菅男をこ（菅男をこ）

十九

女のあに 源氏の后 高今

小やをとこ所の業平所の文忠仁公の家礼(ケライ)なれば
源氏の所ゆゑ言はんかたなく
ごぞう　源氏と云ふは女房の世話なり
くるしかりつ　くるしくなるなり
男はあるなれとも　枕草子のこゝろなり　さつへ
所ゆゑ雲のうへ人の物のうすきに月ふい
ふるあるあり　あるを雲の月ふるえなりとを
きつくなり　雲月ふるえなり
あをのうつゝ　ふるあひふれたちつ
所名今えいはぬのゆゑなり　うふれつ
おもひ雲のうへにのこりて　あることいはるゝこの
風をやこなり　業平はをこしてあま雲と云ふ
ふるい結こ　歌こ口ゝ入心の風をやこいはぬ女の文
なりの歌をすをば　げしこゝろとこは三方古今
小い神の文字ゆゝ　ふつうをこ所ゆゝこしてとあり
一千　昔男ありけり　和にあるを女をとこして　張本なり
こゝ所ゆゝこ　業平ありこ
やうひ　三月こ
くゝそのゆゝ　ゆゝ業平の所いあるこ
枕草子のためくれたる歌の書きかつ　四位ハさてはいとゝ　この所の母くうつゝ　とこの所のとこんこてよめる
業平ゆゝ　業平ゆゝ　枕ハ業平の所ゆゝこ

しくれ　村は春なれと秋のあはれのふくわ
つらなれそ君にほんとて年ふくるとく
いつのまにかそのつもるらん君か里ハ春
なりけりし　咲くえて秋のあはれつらくさつき
云ハ君か里ハ春夜の春あふなく枯にけり
あはれしらてとかえてを取てよわり
一二十一
昔男女いとうしらく　まろなしをなりひとり
とるへく
とりけり　おのすへく

それなりしとひのかん世のなれと人を
しらすまたハいかしく紛く聴く女
宣仁なれ物を捨悪せねと人ハいそまんと云
てくよわなり
けしう　はやしくと云なく　恨の字こ
とみちうみ　急てん角てん　とかくなるこ
もこ　そづくこ
ならひなさせなりけり年月をはぶれ経て
我やすめひし　業くやさ女をさひしりとさそれ

わきハちうひ成る世成りけり我手月をかへん
琴うてやおりもんと女まとかとゆづりきをのれを
ちかてよわる業ゝ家の分寿特に尅乙後紀為代
福徳
人ハいさ　いさハ羽の発起にやきやその教への
字すもへし
ちひやすらん　ちひやすらんちやすやかすらんといふ
幻く
又んかゝみにの標ゝ花の雪ちる甚乃曙

けふやへんの哀の教く
むつくし　女のかくる鬘に
ねりけふのことつんえ情
おりけまゆりくつんあるとく
[illegible]
ゑまりくはまハ
万葉集ニ人ハいさちひやむとも玉葛くげ出え
こそてまするねりことの世両を引出したる
[illegible]
物へうひて　金絶にちひそぶるの哀に
直ゆくけ女の陽忠ふこそ分なよく訳へる
[illegible]
今ハとてワすると苦のこゑみをたにくのもにまちも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たゝゝとゝゝ　たゝめに[illegible]をうまの水の[illegible]

ねゝうに又流てしあゝんとゝ

とゝいひけるとゝゝ秋ふかう　石の[illegible]小形糸

[illegible]ひけるとゝ[illegible]やゝ

[illegible]

秋の秋のちゝを一秋に[illegible]

[illegible]

云々

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の秋の[illegible]夜を一秋に[illegible]

[illegible]

二十四声　秋鹿　[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とりの男　業平

つゝ井つの井つゝに　つゝとをすぬゝてらむ

（筒井の井づゝつゝ井つゝ井筒井づゝ）

とゝゝん　松風こゝみゝ

きゝら　樫ゝの形ゝ

ゆゝ字ゝ筒井の井（イヅツ）　幹（イシ）石ゝ　つゝ井つゝの　つゝ字ゝ

みゝ　徳ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

（ゝに　ゝ　ゝ　ゝ

ごのるし男のそ後十日

かい　ねこ

そて年ごろふるに女やあるたちあ

あるまし（板本ではこの間に「ふるとしにふるとしてゆくへ」）

やいとて御うちの回たうやすのうちにけるとあ

いてそこにけり　世女の祝言をる歌又あもた

あるそうそ　あるそ　世舟ふ舟ひ

河内の回そうあ郎にたちふ人のでそたる所河

内へのうまかりけるとし女のうぶをちの形ひき

付あるとてむげふをしてゆくそこにたちあ

たにいろひあるそ　ゆくへんうら往所とも成ん

（さちよの女　牧有子　姫）

そうけるとし　世女にのそうい　ちわうけるとし

そ公ゆくて　べちの人に公そうとうそふ

たんそん　庭こ　和歌こ

けそうして　俳諧こ

（古今）風ふけそ無は白波たつ回こ和歌ふや云ふひとう

こゆ〳〵ん　いゆ〳〵そうう白波とい道人のるとこり

道人の鈴田の山に分入りて玉の谷や
けうまん　岩の水乳　又は雲母に盛
人の下にゝ波みどりの柳と云白波海漢
の代乃海絨の七こ緑柳（リョウリュウ）お溪の内乃こ城
の名ゝ所れ咲ゝ
小風かけい無ほ白波とゝ昭をいゝを沼男
のゝを楽ゝてゝ
心の道人のゝとゝ様をゝて食ゝゝ玉詩
絡ゝゝれい雲ゝゝ山ゝ三のゝとゝ和歌

とゝ知ゝゝ水ゝ和ゝ波ゝ和と云ゝ
動拙歌（ハヽラハル）歌集ゝ
ひゝひ　版記ゝ
けごのゝゝの　家のゝの巨（ゴ）ゝ
ゝゝゝゝ　ゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ　業ゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝ和ゝ河内と和ゝの境ゝ言ゝ

ふこ　世ちう万葉ふの　ちうと万葉ふ　ていこつて
ちとあう又　彩古人今　立そに　ちうに女　彩立
ちう　ちうなし　ちうや
世ちう人　ちう　業ちう　ちう　こんと　ちう
若ちう　ちう　彩ちう　ちうと　ちうを　ちうの　ちう
ぬい
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
彩ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
男ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
離ちう　ちう
苗男ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう

ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
抜　業ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
男ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう
ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう　ちう

くゝハ新枝こゝあゝしこゝ枝を刈ゝ刈こ
男系ゝゝゝゝ二十年こゝハゆつ乃ゝ三年ゝ乃ゝ新
枝ゝゝゝ枝ゝゝゝゝ

きりい浜乃宮
をうびのち　少将の宣ふ
あひさつぐれ物ゝをとくわゝ我身ハ今ゝ清原
ぬわゝ　女ハとゝ男さつゝ　男さつゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　ゝ　ゝ　

ものさびしく
我身を　ものうきまを　なげてなく
うらと　浦こ　恨にけてなし
ちゝはゝなどや　ちゝとはや　ものう
れ　ものう　不拾こ
あまの　嶋こ　ものうまにたてゝ
あたゆくこゝろ　見たるこゝろ　拾ものこ
ない　汝女　ものう　手に　恨あるあるあるねとこ　我身い
ものうまの　身に　女のあこう　恨あるこい　ちゝて　ものど

乘ものこと　ものう

一（サハ六）　昔男　西條　ものうものう　女を　二條の后こ
ちゝ　ものう　恨不（ウラミサル江）こ
（故障の意也）　ものうものう　人　京　西條　ちゝ　（張出て　ものを
二條の后を　ものうまに　力に　我身（ものう）　ものう　けす
あまを　ものうまの　こ　ものう　紀　京　ものう　にと
ひあつまこ　ものう　人
（我方今）　ものう　ものう　ものう　ものう　船の
ものう　ものう　ものう　舟の　陰の　ものう　ものう
ものう　ものう　ものう　ものう　

湊の喋りと喜の流れて庭前のうるかとなる

一 廿七 苜男

ねうこず　貴賓し　竹を編て一つ前とさしたるこの
とに掩ふ物なり夫をたゝこの形

（うちやり　扱うちやりてうちのけなるべき物なり　女のつけがみのうら　つりてこゝにてなるべし　不分明なれども　女　うる男　扱手ぬき）

我をうつ物なれば人又うしとこゝに水の下に居りうつ
山の内面の友達
扱水口の蛙の一口喰ふあれいろくくふく又喰はれ喰はれ　はたびらあり　夫はたびらあり　はたびらあり　はたびらあり　

こうしあと　遠江郡（アフミカウヲリ）く　初に云うけたり
（枕くみ小袖の内へ涙こぼれかゝるとこゝろ）
袖に涙こぼるゝ水のうちに沈みてくるしきうつゝ
しるひるかさとも

一先　昔三条の女御　二條の后女御の附りすし
三条の陽成院と申奉十一年二宋にて亡き
いとゝ語を毎女御こゝに附て
宋の咲　咲ハ宋ようとて十に陽ってこゝに
をすゝ咲とゝもしまあゝい宋の咲れい宋の
咲をハ宋の咲所ゝ所に舞て云し　二條后

の宋の咲をしゝ歌
（枕業平の事ゆかりの所にて）　業平に事ゆかりと侍て所て
宋ハ所ハ歌をハ
仰ハ所ハ　ゝ公ハ業ことに宋を賞すれ
ゝ公ハ月ゝ夜と口説を恨ひよゝ下ゝ
ハ女御のをゝ
ハ女御のをゝ

一三　昔男ゝ
あゝ玉の緒
くゝ

川ゑの
をとるすハ玉の緒とうの名のうらいなれの川乃
澄清流乃ごと

一 菅こもらら 穂中こ
ひとうらら とゆらく
おもく 怨こ

こゝろ思ふよ可〳〵んさがみんとい〳〵 人死て云に
枕さがハ悪芭蕉の名ハ若葉りよ枕くめてハ名れりこゝにして葉手しをみ行さゝゝゝみてえこ
埋わいるよ世をを さ可〳〵んさがをこんとのうひ
てゝう

川ゑの
ゑ行つゝさハいた名ゑ
んさがこん 身海屋名著 一丘 杜子笑
男
つゝこ可さうをうけ(ば)枕ゑ名ハ
ハ可る うけ(ば)そのそ
をふハ(ば)ゆ(ば)ゝ 名可ゝを(ば)のゝ(ハ)ハ(ば)れ名ゝを
のをゝこに行ゝとゝ(ば)ゝ 畏(ゲン)ゝ(ば)ゝ(ニン)
ゝ可ゝ名の左ゝ可ゝ(モン)ゝ(ば)ゝ(トウ)
名ゝむ女ゝ ゝくひゝゝ
ゝゝ思ゝ名ゝ名ゝ

三十二

一 若くのいとけなき女ふ　うつくしひなる女こ
（古今）
別れ〳〵のこゝろのまゝ　さまざまに　苦を今たに
すゝまるゝ　紙ハ下腦し　小園（ヨダ）に　芋（ヨ）を
（ワク）
雙こ　この二句ハ紙ハ　とゝ　ゝ　の序
（引古今）
（仮名序の説）
一 花の紙の中間に　（教鬼示初心）
ハ　ハ　ハ　の　ハ　ハ　ハ

仏名の詞

一四 若男つまおろうろ人　鄙面

はいそよいそ胸にさりてなびちつに前げ

くしげ　はそんとすそもそそいそそをいそそ

むすさそだいうにせんとなぞうにとひ前げ

くあり　玉作仏体不手半　三鬼行

たりかくて　忘れてたりてづまあ云

玉面月

一四五 菅仏ふとかくてそそたる体　言ひ前て

をさうしく

むの結をあそをにうてむすへたえての法

あうへそそ心ふ　玉にていむの結令のるにあ

ぐすうさ世とい家く　むとつけたいらつく

きもく　あそをい合結く　合結にうて結

ひ糸のとけてもそうもけめく結ての

はもそあうへそしひ方ふにいむの緒をなと

をにうて結くそあうてはふもなとそうあや

ひとあう

[illegible]
玉乃緒に七人

一 [illegible]
若日子れわるかわう　[illegible]
[illegible]
字男のうむ所いたつ女のうむ所いたねねく
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

世のをとこのあさうなるあざけりにたとへさわるれ
人ふ[illegible]ふ[illegible]と云ふ
ふうふ[illegible]てむすひ[illegible]紙をひとう[illegible]てあひうん[illegible]
男てはとう[illegible]とそ[illegible]　公門ふ紙のふい迷にし
ふい続ふ

一八　ふう紙あうつるひ[illegible]ふうてこ　みたをもとへ[illegible]てこ
あうきておそくさき　万葉ふ七ゆ　妹(イモ)が(ガリ)許と言(ワガユク)去と来たう
りるふ　板の三年
ふ[illegible]りて医くゆ　板君と[illegible]三年知て[illegible]
ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]

たゞいこ　宮子内親王（メカイコヒメミコ）、ハ藤和元宣の母女房
舟橋の船子（フナコ）と号し宣旨を橋清秋の女房
寛和二年五月十五日薨
いまそかりをり　たゞしまゝ　清涼と出し
門をとり　門警衛し　そうもうとうもう
ものかたり男　ものかたりし
女車におひのり　業平女車に乗りて
かそいで　侍出（イテイデ）し
ゆきゝ　送りをり　警送たをとに伝てゝ
車を教業平の乗り車
車ゆうりる人
牧　女ゝくるまハ
わらんとゝふく
人ゝ　ものこの
人ゝ　書く
みかゝとのゆきゝ　伊勢伊
源氏　五宣の御子に　陽成（ヤウイン）　右京大夫源
御母わく　けさうじたるゝ
女の車にゆきたり　業平の家ゝの女車に入
ゝるゝ
ものけち　燈ゝ　畳をけさんとゝるゝ

ひぞ[illegible]　ひぞ[illegible]　ひぞ[illegible]　[illegible]
[illegible]　今世の限りなし
[illegible]　[illegible]の名消[illegible]を量[illegible]をけ[illegible]に
けて[illegible]法華経の如炬[illegible]燈滅の[illegible]
年[illegible]　ひぞ[illegible]年[illegible]
法華[illegible]　我[illegible]歌法華[illegible]と今付[illegible]
あ[illegible]紙の帳新[illegible]を載[illegible]
[illegible]法華[illegible]
我[illegible]

この句は業[illegible]を[illegible]

[illegible]の句は人の名を地水火
風を帳に結ひたるを死[illegible]法界[illegible]の
消て滅[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ものとあり　代の人くしれいは[illegible]物語は[illegible]
[illegible]人のとうもうあり　[illegible]又は[illegible]数志[illegible]
[illegible]とこそ[illegible]とあり　[illegible]説あるいはいさゝかの欲[illegible]
[illegible]の[illegible]とにも[illegible]詞をおしこけてうもう語
[illegible]

[illegible]のほいの[illegible]　四祝[illegible]のあいだ[illegible]とあり

里[illegible]　[illegible]　不[illegible]　[illegible]歌　[illegible]

一甲　昔[illegible]　業[illegible]

けしうはあらねば　下四[illegible]　[illegible]

さうしさうし祝　さうしたゞ[illegible]

[illegible]の親[illegible]

[illegible]

業[illegible]

さうひとうんとあり

[illegible]人のもとに　業平

[illegible]　業平

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

女も[illegible]

夢ことゝうく　五子羽延　莫如爵卿堂

莫如園（ヨイニ）

すきもとゝうく　きんかに横（スヽウ）とゝうの句とそ、

そねこ

をひうつ　知をひやり弾る山ん逐（ヨヒウツ）

ちの句ゝく　ちひの切句るく

門ゝ句素性法今十六

知の流ハ流ハ白河ハ名の代と名にこそ

ゝ月ゝ也

そゝとゝ句　ひゝとめてゝゝ句ゝく

とゝて句ゝく作ゝ句ゝ也の郷ゝ句ゝ　ゝにまゝゝ句ゝ

ハゝ句ゝ　只ゝゝ出てゝ行たゝゝゝ又ゝ逢ゝ句ゝ人ゝ

月作ゝ句ゝを郷ゝ句ゝ　ゝゝゝ也ゝ人ゝ

にゝゝゝ付ゝゝ知ゝにゝゝを句ゝゝゝ今ゝゝハ

たゝゝゝ逢ゝゝも句ゝゝゝゝゝゝゝ一人ゝ句ゝゝゝく

たゝゝゝゝゝ　句ゝゝ年絶事せゝく

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝく

ゝゝゝゝゝゝゝく

ゝゝゝゝゝゝゝく

教女の親の公ゝ所ゝ人ゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今の義　昔の男人に對して女方の代ハ
人のなを称ぜずして女をとらへてとうすることし
一四十一　昔女ども〳〵ふたりうゑ　姉妹く
ひとりハ男〳〵をたとこ　たゝきたる所　緣し
ひとりハ所なる男　業平のるゝ　きし
うのこゝね　袍のるゝし
こゝろ〳〵いく〳〵ふたりもこと　志ハ敬ふこと
いとこゝろ〳〵　清し
ろうこゝうのう（のこゝね　緣（リヨウ サヒ）敬の袍（ハウ）し　立居の袍（ハウ ウヘキヌ）

緣（ヨリ）の敬（ケイ）し緣ハ昔の敬ハ業平の事ハ此ゆゑ敬ハ業平の事ハ此ゆゑ敬ハ業平の事ハ此ゆゑ
業の色こゝ所ハ　我書の影色ふり紙を云し
めこゝろ　月ハ遠ハとも遠し遠の下略
袍の字を袍の色をこゝろ　見居居なる
袍の字ひとつハ書るとく書のゆゑ所れハし
一四十二　昔男色このことを女をおもひ（おもひ）ひとつ
とにく（我ゆゑ我ゆゑ我ゆゑ我ゆゑ我ゆゑ我ゆゑ）　なる人とこう
所〳〵ゆゑ所ハ所ハ所ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

仕こ
人(叔達等)の前まわりして　こと人(けさうぶり)
我のことをつひらを　業平我そう面てをとひ
しし
又人(叔達等の野のことをひらる)こと人の面てをと業平の竹
付しし
かこやる　業平まうす女の文やるし
かとこぶしかがたくさとの竹のまわとい面をこと
まもねさてのうの
かが面くい汝の時之安

をかとこしふたとへて竹のこの人にこと仕
仕らさまとも切に文を加うとむ
とも竹の方今市三小こと三人すこと
けしことをとして　業平の二条をとる
各のこと竹までのたをこいけさかくかう
竹のまたとうとも也　各そうたして
こと人(ハクふ)とも竹ことうとも
取逃契して今面くとこ　までのたをこの
文吳竹多しとも文たこ小くいかこと

の矣合とうてくらふらう

引こうこう今

歳の田をつくりもとをかたくくらすうてのたを

こと新かくくる　世ちいかの稀なる稀の田毛（レブ　タヒヨサ）

付いこうこに初合の

にかくくこれのるをいふをいかとうこ

月日初合

月日初合までのたをさい程植むワゲすむ

里に居りたいをいふうこうこ多くこれ方へ

たへをとつもこを程植むとこ　人ちこぐ

公初り年の女性必法

[別] 刀自ハ一家ニテ主ノ妻ヲ云ヒ也　カジ　四十四

此云親自と云ひ巻十三　今四

又坂上郎女ノ歌ニ　大嬢

我兄の刀自ちのみ

なりうくて　ちのみ

ハ主の男

少て神祭ニ主を取

みせじと思て　主の

苦ゆくこ　初人小　編こ男合をいふこ人ハ名

初人

澤路の傳と云ふ

ちのそれむけ　澤路の傳と云ふ

ちのそれむけ　澤路の傳と云ふ

ちのそれむけ　

にてうすの百姓も稲刈〳〵あり稲刈〳〵とて農業
の業を喪ふ〳〵ことたるに喪ハ稲也（ロサハイ）
けふあいあるゝ中に面白き業をなすべきなり
後にあづかりひて　けふとゝの句あるあちらひてを
伝授の句く業まを紙をとゝかてゝゝて書の
ちにてゝまゝゝふゝたゝにあちらひて公後
小抜味し

四十五

一　苦男〳〵づく　霧雨し
けふ男にあいそんとゝもをう　業まにあひたゝつまを

あ〳〵ふゝく
あいそんゝ　云ゝ〳〵ゝ
あいそんに　あつて　あとゝ病し
あ〳〵つげたり　紀あり　業（云ます）あり
まゝとゝ業　怒まあし　苦まをまどひゝそさ
まあり
つれ〳〵にこゝをうゝ　死（死ゝゝ死ハ）
紙と忘にこゝう　忘し
涼しさ　猶（ヤウヤク）とハ涼し

海抵

引[illegible]雲のたちのわかれ[illegible]
[illegible]をしわかるるなみ[illegible]
とはるにたちびかりつる[illegible]
[illegible]
源定[illegible]雲のたちとびさそふ桜風
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

四六
一 苔寒一いろくつくし
わかるれば　[illegible]の海[illegible]の松
日新又日花と本し
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

四七
一 苔寒物ぐるふいそで
[illegible]

わざおうと　女のもとに業をわざとくひ
ておひらねし
花はやさのひくてはまたにあはとへとそこを
形まこうりを　花はやさい帯帛のもと麻
小麻の芯をもく付うをこし大麻（スサ）と出おう
又猿の帯引くい紙をとこうちうすし
引はい浦後（ギ）の内あはうの人乃
西にとまきしこを所てくに業まをあはこと
小うつろくを所をこを新はれをとおう

ひこ男　ひこ古今十四小猿人をしこ流とおう
花はやさこを石にこをたてを流ても絶はう流い
あうてくあを　大はやさい後しに男て海川流を
く流て行未はうあるあく大はやさい業年
我身にたくへう流い女にをてあう　琴公人
一男　むし男一
今をこうこうあと人はまたん室をいれを寝う
ふう　世をの人乃行和（ふなく行）こすおうと
今行俺乃我をにをひ合をて人ふと新うし

高野雁下紙のとしごろ反古の紙にまろ
ろ舟にろの乙紙むけをんとて今といひし
をこそまろ舟にそうこにまろうさく
紙ろみるをみえさうろをつくろ世
業ぞ紙屋とあり